

# 捻挫におけるアイシング処置と鍼灸

吉岡広記

## I はじめに

急性期の捻挫に対する処置は、いうまでもなくアイシングである。これは整形外科的処置であるが、おそらく周知のことだろう。それに対し鍼灸では糸状灸を施すわけだが、ご存じの方はほとんど皆無であろう。それだけでなく、その処置に対し恐怖感・不安感等のマイナスイメージを持ってしまう人が多いのではないだろうか。同じ捻挫に対する処置にもかかわらず、その方法・イメージが全く異なるという現実がある。この相違はどこから生じてくるものなのだろうか。そこで本発表では、捻挫の初期治療における整形外科と鍼灸との相違点を明らかにし比較検討することで、皆さんが鍼灸という《もう一つの医学》を再考するための一助としたい。

## II 捻挫の捉え方及び治療方針

### 1. 整形外科

#### 1) 捉え方

外力により関節の動きが正常範囲を超えることにより起こる軟部組織（靭帯、関節包など）の損傷。関節部の炎症（腫脹・疼痛・不安定感等）の程度から重傷度を三段階に分ける。

#### 2) 治療方針

患部の抗炎症。

#### 3) 初期治療

受傷直後の処置はR I C E処置である。このうちアイシングは通常24～48時間程度行う。アイシングは、消炎鎮痛・抗発熱・抗痙攣性・抗火傷・コラーゲン弾性の増加・局所代謝の減少等の作用がある。実際の方法は氷と水をビニール袋などに入れ、15～20分を限度として間欠的に行う。アイスバッグを使用する場合、ビニール袋に氷を入れておくときはタオルにくるむ。紙コップ等に作った氷を直接使用する場合は、7分を限度にする。冷却スプレーは、深部までの冷却作用の到達力は弱く、また、皮膚に炎症をきたすこともあるので注意を要する。

### 2. 鍼灸

#### 1) 捉え方

当然ながら中国医学における固有の要素（陰陽、五行といった思想、言葉）を用いて、捻挫という現象を捉える。

外力→経脈の損傷→血の漏出→瘀血→寒→疼痛

↓

赤，熱→発赤、腫脹、熱感、疼痛

具体的に説明すると、まず外力を受け、経脈の損傷が生じる。経脈には当然血が流れているので、出血が起こる。経脈外に出た血を瘀血といい、当然それ自身では動くことはない。つまり、滞ることになり中国医学的にはその状態を寒と言う。寒は氷が割れるイメージから固定性の疼痛が連想される。次に、血は赤であり、それから連想されるのは、熱である。熱は陽なので、気であるとか物が上にある、膨張するといったことが連想される。つまり、発赤、腫脹、熱感という状態が生じる。捉え方は、熱と瘀血（寒）ということになる。ここで、同じ患部にも関わらず、相反する寒と熱の状態が共存するという矛盾が生じる。中国医学は一見、陰陽五行説によって一貫した理論統合がなされていると思われがちだが、じつは、陰陽五行説を規範とするもののそれ自身は矛盾に満ちている。例を挙げると、体幹は陰であり四肢は陽である。しかし見方を変えると腰から上は陽であり腰から下は陰となる。このように、見方を変えるだけで四肢は陽であるのにも関わらず、下肢は陰といったような矛盾が生じてしまうわけである。ちなみに慢性期になると、血の熱は冷めるので純粋な瘀血の状態となる。症状は、発赤、腫脹、熱感は消失し、固定性の疼痛のみになる。

## 2) 治療方針

患部の熱及び瘀血を取る。

## 3) 初期治療

腫脹部に皮膚鍼ないし散鍼をし、周辺部に数ヶ所糸状灸をする。皮膚鍼及び散鍼は、局所の熱を取るために行う。糸状灸は、熱を加えることにより瘀血（寒）の状態を解消するために行う。

## III 考察

捻挫の初期治療は、整形外科ではアイシングであり鍼灸では糸状灸である。前者は「冷」、後者は「熱」であり一見すると正反対のことではあるが効果は同じである。それどころか、場合によっては後者のほうがより効果があることも多々ある。今や私たちの常識は、科学的（医学的）なものに支配されている。だからこそ、捻挫に糸状灸をするということにわかには信用できないのである。言い換えれば、そこに科学的なまなざしを無意識のうちに向けてしまっているのである。果たして本当にそれでよいのだろうか。中国医学を正しく認識しようとするならば、そこには正しい知識が必要となる。その正しい知識は、中国医学固有の要素を学ばなければ得ることができない。なぜなら、中国医学と医学は各々規範とする学問体系が異なっているからである。中国医学は私たちの常識の守備範囲を遙かに陵駕している。とにかく鍼灸をする以上、私たちは中国医学固有の要素を学習せざるを得ない訳である。

話は戻るが、整形外科と鍼灸では治療法が異なる。しかしながら、現実的有効性においてはほとんど変わらない（各々適応と禁忌はあるが）。この事実を正確に認識する必要があるのではないだろうか。つまり、中国医学は《もう一つの医学》であるということ。